



責任放棄の立野ダム建設

昨年8月の立野ダム本体着工以降、国土交通省は白川の流れを仮排水路バイパスに転流させ、ダム建設を推し進めています。立野ダム建設予定地周辺を最近見て驚くのが、建設予定地とその周辺の山々の崩壊がさらに進んでいることです。立野ダムは、建設予定地が崩れやすい火山性の地質で、近くには活断層も確認されています。また、洪水時に大量に流れる流木や岩石等により幅5mのダムの穴がふさがり、洪水調節できなくなります。



土砂崩壊が進む立野峡谷 2019.4.12熊日新聞

立野ダムは、ゲートのない「穴あきダム」です。近年、「想定外」の豪雨災害が頻発しています。ダムによる洪水調節では、従来のマニュアルでは対応できない「想定外」の降雨ではダムが満水になってしまい、全く対応できません。人為的なダムの操作（ゲートの開閉）ができない「穴あきダム」ではなおさらお手上げ状態で、流木等でダムの穴がふさがった場合はさらに危険な状況になるのは明らかです。「穴あきダム」は、設置者の洪水を制御する責任を放棄した方式だと言わざるを得ません。

また、益田川ダム（島根県）等、全国に建設されたいくつかの「穴あきダム」が実際に大洪水に対処した例はなく、ツマヨウジを流木に見立てた小さな模型実験を基に「ダムの穴は流木でふさがらない」としている事を考えると、白川流域住民を「穴あきダム」の実験台にしているとしか言えません。6月16日の集会では、熊本県立大学名誉教授の中島熙八郎先生（京大論工博）をお招きし、立野ダムについて改めて考えたいと思います。是非ご参加ください。

●前滋賀県知事・嘉田由紀子さん講演に300名参加！



昨年12月9日、大津町で開いた「ダム災害と流域の安全なまちづくり～立野ダムは災害を引き起こす～」に300名が参加。想定外の豪雨が増加する中、流域の安全を守るまちづくりについて学習しました。西日本豪雨の調査結果の報告を踏まえ、流域の安全を守るためには堤防強化や河川敷の掘削や樹木伐採、住民と一緒にしたハザードマップ作りや学習、危険な場所には病院などの公共施設をつくらない、山林の整備などが重要であることを学びました。想定内の雨ならダムはいらないし、想定外の豪雨ではダムは危険をまねきます。多額の予算を投じてダムをつくるより、自然や人の営みと共存した安全対策と流域の安全の確保の取り組みが重要であることを学びました。

■立野ダム関連年表と主な活動報告 2012年5月～2018年12月

- 1969(昭和44)年 立野ダム予備調査着手
- 1979(昭和54)年 立野ダム実施計画調査着手
- 1983(昭和58)年 立野ダム建設事業着手・事務所発足
- 1984(昭和59)年 立野ダム損失補償基準妥結(宅地・建物)→旅館2戸、住家5戸、宅地2.5ha
- 1989(平成1)年 立野ダム損失補償基準妥結(農地・山林)→農地3.4ha、山林26.7ha
- 1993(平成5)年 地域整備計画についての協定書の調印(国・県・下流受益市町・旧長陽村)
- 2000(平成12)年 白川水系河川整備基本方針策定
- 2002(平成14)年 白川水系河川整備計画策定
- 2010(平成22)年 12月15日 立野ダム建設事業の関係地方公共団体からなる検討の場(準備会)
構成:国交省、熊本県、流域7市町村(熊本市、阿蘇市、大津町、菊陽町、高森町、南阿蘇村、西原村)
- 2011(平成23)年 10月14日 第2回立野ダム建設検討の場で国交省が立野ダム以外の治水策を提示
10月17日～11月15日 立野ダム建設事業の検証にかかる検討に関する意見募集(パブコメ)
12月1日 国土交通省に「立野ダム建設中止を求める要望書」を提出
- 2012(平成24)年 5月19日 「立野ダムによらない自然と生活を守る会」結成集会 40名参加
7月12日 白川流域で集中豪雨(九州北部豪雨)。阿蘇の土砂災害で25名が死亡・行方不明
8月9日 国交省に「白川の河川整備計画の変更と立野ダム建設検討の場に関する要望書」を提出
9月11日 立野ダム建設検討の場(第3回)国交省が「立野ダム建設検討報告書」を提示
9月18日 熊本市議会が「立野ダム建設推進を求める意見書」を可決
9月22～24日 公聴会(熊本市、大津町、南阿蘇村)。発言した30名全員が立野ダム反対意見
10月3日 熊本県議会が「立野ダム建設促進の意見書」を可決
10月23日 熊本県が白川の県管理区間の新たな改修計画を発表
10月24日 熊本県知事が国交省の立野ダム事業検証に対し「異存なし」と回答
10月29日 国土交通省九州地方整備局の事業評価監視委員会が立野ダム事業継続を了承
- 2013(平成25)年 5月30日 立野ダムより河川改修を進めることを求める要望書」を提出
6月12日 白川改修計画(熊本県管理区間)現時点での住民案を熊本県に提出
10月1日 国土交通省に公開質問状提出(1通目)
- 2014(平成26)年 8月17日 第1回立野ダム予定地現地調査 200名参加
11月27日 阿蘇の世界文化遺産認定に関する要望書を県知事に提出
12月19日 国交省に立野ダム仮排水路着工に対する抗議文を提出
- 2015(平成27)年 7月22日 国交省開示データ分析「河川改修で立野ダム不要」要請書を提出
10月4日 第2回立野ダム予定地現地調査 170名参加
10月13日 阿蘇ジオパークに関する意見書を阿蘇市などに提出
- 2016(平成28)年 4月14,16日 熊本地震で立野ダム建設予定地周辺が大崩落。
4月28日 国交省に「立野ダム建設の即時中止を求める要請書」を提出
8月17日 国交省の「技術委員会」がわずか3回で「立野ダム建設容認」の結論。要請書を提出。
9月16日 国交省に「立野ダム建設に係る技術委員会に関する抗議文」を提出
- 2017(平成29)年 3月16日 「立野峡谷の土砂崩壊の対策等に関する質問状」を熊本県に提出
5月12日 「白川改修・立野ダム建設促進協議会に関する要請書」を流域自治体に提出
8月24日 国交省立野ダム工事事務所に説明会開催などを求める要請書を提出
9月24日 立野峡谷の柱状節理破壊に関し国交大臣に公開質問状を提出
10月28日 県民総決起集会「阿蘇ジオパークを立野ダムでこわさないで」300名参加
- 2018(平成30)年 1月12日 国土交通省に公開質問状(9通目)提出。
2月24日 白川の安全と立野ダムを考える流域住民連絡会が発足
7月22日 立野ダムと白川の安全を考えるシンポジウム 熊本県民交流館パレア 230名参加
8月5日 国交省が立野ダム本体着工。抗議集会 南阿蘇村立野ダム建設現場前 150名参加
12月9日 前滋賀県知事・嘉田由紀子さん講演。シンポジウムに300名参加(大津町)

●立野ダム予備調査開始から50年が経過

今回の会報では、ちょうど半世紀前（1969年）の立野ダム予備調査開始から今日までの主な出来事を振り返りました。40年間以上、ほとんど工事が進んでいなかった立野ダム建設が動き出したのが、皮肉にも「コンクリートから人へ」のマニフェストで政権交代をした民主党政権が進めた「ダム事業検証」でした。民主党（当時）の前原国交大臣が全国のダム事業の検証（見直し）を国土交通省に丸投げしたのが全くの過ちでした。2012年の立野ダム事業検証の時に、白川流域の3か所で公聴会（住民の意見を聞く会）が開かれましたが、30名の発言者の全員が立野ダム建設に反対の意見を述べました。しかし国土交通省はこれら県民の声を無視し立野ダム建設を推し進め、ついに昨年8月にはダム本体着工に踏み切りました。

その間、白川流域は2度の大地震に見舞われました。2012年7月の九州北部豪雨で浸水被害を受けたのは、未改修の場所だけでした。その後、河川改修が進んだおかげで、九州北部豪雨クラスの大洪水が来ても白川はあふれません。同災害で死亡・行方不明となった25名の方々は全て阿蘇カルデラ内の土砂災害によるもので、立野ダムを造っても土砂災害を防ぐことはできません。災害を防ぐために白川で今必要なことは、上流域では土砂災害対策（荒れた人工林の間伐や阿蘇の草原の保全）や遊水地の整備、中流域では河川改修、下流域では川床にたまった火山灰の撤去です。

2016年4月の熊本地震では、立野ダム水没予定地の大半が土砂崩壊を起こし、周辺では活断層も確認されています。熊本地震のときに立野ダムができていたら、幅5mしかない立野ダムの穴は流木や土砂、岩石などでふさがり、ダムは埋まり、流域を災害から守るどころか、災害をひき起していたはずです。このような地盤がぜい弱な火山地帯にダムを造って豪雨時に水がたまれば、更なる土砂崩壊が起こるのは明らかです。

私たち住民は、立野ダム建設に関する公開質問状を9回にわたって提出しましたが、国交省は一度も回答もせず、ただホームページを読めとのことです。ホームページに掲載された「回答」を読むと、住民からの質問に対して論点をすり替え、国交省の主張が一方的に書いてあるだけです。毎年6月に東京で行っている公害総行動の国交省本省での交渉時には、熊本県民に危険をもたらす立野ダム建設を即時中止すること等を強く申し入れます。

●会計報告(2018年4月1日～2019年3月31日まで)

収入の部	金額	備考
繰越金	3,070	
年会費・カンパ	761,424	
合計	764,494	

支出の部	金額	備考
郵送費	230,504	会報発送、資料発送
事務用品費	23,931	紙代、封筒代、プリンターインク代
会場費	99,818	パレア、森都心ホール
カラーチラシ印刷配布	273,163	A4版両面印刷1枚約2円、チラシ配布
その他	128,769	講師謝礼、印刷機使用料
合計	756,185	

(収入) 764,494 - (支出) 756,185 = (残高) 8,309円

最近の集会等にご参加いただいた皆様にも、会報21号をお送りします。当会は、皆様方の年会費（一口1000円）とご寄付のみで運営しております。今回、2019年度分の会費振替用紙を同封させていただきました。今後ともご支援のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

●国交省の「切り札」穴あきダム（洪水調節専用ダム）

全国の現在のダム計画を見てみると、ダム災害や川や海の環境の悪化、ダムに土砂がたまり海に土砂が供給できなくなることによる海岸線の後退などの「ダムの害」が明らかになり、ダム建設の適地も非常に少なくなっています。また水需要も低下し、今後、多目的ダムを建設するのは非常に困難な状況です。そこで国土交通省は、ダムの目的を治水だけとした洪水調節専用ダム（穴あきダム）を、ダム建設の「切り札」としているようです。

淀川水系の大戸川（だいどがわ）ダムは 1991 年に計画された多目的ダムですが、上水道等の水需要が低下し、国は 2005 年にいったん建設中止を表明。2007 年に洪水調節専用（穴あきダム）に変更して計画を再開したことに対し、滋賀県の嘉田知事（当時）ら 4 府県知事が建設中止を求め、2009 年に計画が凍結されました。ところが滋賀県知事が交代すると、三日月知事は方向転換し、残念なことに大戸川ダム建設を容認する考えを表明しました。

熊本では、2008 年 9 月に蒲島知事が川辺川ダム建設反対を表明して 11 年が過ぎました。ダム中止後の治水対策を考える球磨川治水対策協議会で、川辺川ダムの治水代替案が今も決まらないことについて、「逆に川辺川ダムが必要だということを証明した」との県議の発言も聞かれるようになりました。しかし、治水代替案が決まらない理由は、ダム建設を前提とした過大な治水計画にあります。



国交省と地元自治体による同協議会では、「人吉は 3 年に一度は堤防が決壊する」ことを前提とした治水対策案が検討されてきました。しかし、人吉市内で堤防が決壊したことはなく、過去最大の 1982 年 7 月洪水も堤防を越えることはありませんでした。

ところが国交省は同協議会で、人吉で川幅を 100 m 広げる大規模な川の拡幅案でも水害に対処できないとし、今後他の方法と組み合わせた治水代替案を検討するとしています。これでは、決まるものも決

まりません。

国交省は蒲島知事の交代後に、洪水調節専用（穴あきダム）の川辺川ダム計画を提示してることが大いに考えられます。「穴あきダム」は、設置者の洪水を制御する責任を放棄した方式であることを明らかにするとともに、球磨川や白川で行われてきた国土交通省の「治水対策の検討」がいかにかにダム建設を前提とした過大なものであったかを改めて明らかにする必要があります。

編集後記 2月に、「立野ダム工事現場見学ツアー、専門ガイド付き」という県内のあるバス会社のチラシが新聞に折り込まれました。専門ガイドとは、国土交通省の職員なのでしょうか？一体どのようなツアーなのか驚いた住民がバス会社に問い合わせたところ、そのバスツアーは中止となったようです。また報道によると、立野ダムの建設現場を間近に見ることができる展望所「たてのてらす」が国交省により完成。3月25日に報道関係者等に披露されたそうです。許可を得た見学者向けで、一般には開放されていません。同省担当者は「観光客の増加につながることを願っている」と述べたそうですが、コンクリートの塊であるダムを見に観光客が押し寄せるような例は全国どこにもありません。国交省は、ダムの建設現場の迫力ばかりを強調しているようですが、一体何の目的でどんなダムを造ろうとしているのでしょうか。都合の悪いことは隠し、都合の良いことばかりを強調する。私たちは白川流域の安全を守る立場から、災害をひき起こすことが十分に想定される立野ダム建設にこれからも断固反対します。6月16日の集会にご参加ください！（N.O.）